

母子手帳から考えたこと

小 五

ぼくはこの間、予防接種を受けに行きました。予防接種を受けるときには母子手帳を持っていきます。

病院の帰り道、ぼくは、初めて母子手帳の中身を見せてもらいました。中にはぼくの赤ちゃんのころから今までの記録だけでなく、ぼくが母のおなかにいたときのこと、たくさん書かれています。

母は、「つわり」といって気持ちが悪くなったり、ものが食べられずフラフラになったりと大変だったようです。その中に「職場の人に迷わくをかけられない。」と、働いていた母の様子も書かれ

ていました。そして、切ばく早産という状態になり、三カ月間も入院することになってしまったことも書かれています。

少し前、新聞でマタニティ・ハラスメントという記事を読んだことがあります。それはおなかに赤ちゃんがいるにん婦さんが、体調の悪いことを理解されず、無理な仕事をさせられたり、休ませてもらえなかったり、ひどい態度をとられたりすることです。記事の中には、仕事をとり上げられたり、会社を辞めさせられたりしたという話もありました。どうして赤ちゃんが生まれてくることを一緒に喜べないのか、一緒に働いている仲間を助けられないのか、とてもぎ間に感じました。

「にんしんは病気じゃない。」と言う

人がいます。そういう人は、自分自身が気持ちが悪いつき、体調が悪いつきに、誰からもやさしくされず、ほったらかしにされたらどう感じるのだろうと思います。

また、「おなかに赤ちゃんがいます」というマタニティマークを、電車に乗っているときに見ると、席をゆずってというアピールだと感じ、不快だという人もいます。

母に、「このマークは、急にたおれたり、事故にあったりしたとき、周りの人に自分がにん婦であることを伝えたり、病院でにん婦さんに使ってはいけない薬を使われるのを防いだりする大切なものなんだよ。」

と教えてもらいました。どうしてそのよくな大切なマークを曲がった気持ちで

受け止めてしまう人がいるのでしょうか。

赤ちゃんは泣いて生まれてきます。あの本には、「これから、たくさんのつらい人生が待っているから、こわくて泣いている。」と書いてありましたが、ぼくはそうは思いたくありません。みんなが少しずつでも助け合う気持ちを持ち、赤ちゃんが、自分が生まれる前に、たくさんの人の支えで、お母さんが助けられたという喜びと、楽しいことがたくさん待っているといううれしさで泣いているという世の中になってほしいと思います。

今年から元号が令和に変わりました。令和には、人々が心を寄せ合って、文化が生まれ育つ、という意味がこめられています。人々が心を寄せ合って、手を取

り合って助け合えるやさしい希望あふれる世界が待っている、令和に生まれる赤ちゃんには、そんな幸せな気持ちで生まれれてきてもらいたいと思います。

最後に母子手帳の話に戻りますが、つらい記録ばかりではありませんでした。ある日、体調の悪い母を気づかい、混雑している電車で席をゆずってくれた高校生の方が書かれました。そのとき、母は、おなかの中にいるぼくに、こんなメッセージを残していました。「今日はやさしい男の子に助けてもらったよ。あなたもいつか、そんな人になってね。」と。

それを読んで、ぼくも誰かのやさしさをもらって生まれてきて、今、そんな生きているのだと実感しました。ぼくは、にん婦さんはもちろん、いろいろな人や

さしくできる人になりたいと思います。